

ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論』における社会学構想

東海大学 飯島 祐介

1 問題

ユルゲン・ハーバーマスは、その主著である『コミュニケーション的行為の理論』（1981年）の冒頭で合理性の条件を再構成する哲学と協働し、合理性の構造の具体化と歴史的発展を経験的に分析する社会学を構想し、実際にその構想に基づいた社会（学）理論を展開しようとしている。こうしたメタレベルでのハーバーマスの構想については、カール＝オットー・アーペルなどによってすでに一定の研究の蓄積はあるものの、この構想に基づいて展開された社会理論ほどには注目されてこなかった。本報告は、この社会学構想がそもそもいかなる脈絡のもとで導入されたのか、ハーバーマス理論に内在的に明らかにすることを試みる。さらに、この試みを踏まえて、理論と実践の関連をめぐるハーバーマスの立場を、とくにフランクフルト学派第一世代との関連においてあらためて整理し、そこから本テーマセッションの論点のひとつである、「理論・学説研究により、「現実」のほうを変える可能性」について、展望する。

2 方法

ハーバーマスは、社会（科）学の構想に関わる議論を、社会理論の展開に必要なかぎりまで、それと並行的に行っている。そこで、本報告では、(a) 上述の社会学構想を並行する社会理論の展開との関連において捉えることにする。また、ハーバーマスは、「社会哲学との関連における古典的政治学」（1963年）をはじめとして、社会科学の構想に関わる議論を、初期の段階から行っている。そこで、(b) 『コミュニケーション的行為の理論』での社会学構想を、それに先行する構想との関連において捉えることにする。

3 仮説

本報告では、とくにつぎの3つの仮説に基づき検討を進める。(a) 『コミュニケーション的行為の理論』は、『公共性の構造転換』（1962年）以来の公共性の可能条件をめぐる問題を認識枠組みの組み換え——「国家と社会の二元論」の「生活世界とシステムの二元論」への組み換え——によって解消する試みとして理解することが可能である。この認識枠組みの組み換えによる問題の解消という理論戦略は、(b) 社会理論を「認識する意識の自己反省」として構想する『認識と関心』（1968年）に由来するとともに、(c) 『コミュニケーション的行為の理論』冒頭で展開された社会学構想をもたらしている。

文献

- Apel, Karl-Otto, 1998, *Auseinandersetzungen in Erprobung des transzendentalpragmatischen Ansatzes*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Habermas, Jürgen, [1962] 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Neuauflage, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- , 1968, *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- , 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.